

# 俺たちの町



作者 エリー



# 目次

1話「約束」	1
2話「ひらめき」	2
3話「公式と数式」	3
4話「達成」	4



## 1 話「約束」

春風そよぐ校庭で、鉄棒にぶら下がり、親友の雪政(ゆきまさ)と話す。

「算数、最悪だったな。特に割合。そんなもん、目分量でいいっての！」

「プールの水に塩素を何個入れるかも、陽介(ようすけ)は目分量？」

雪政の指摘に、即答する。

「俺には雪政がついているから、お前に聞くよ」

いつもなら、「陽介が目的を決めて、俺が段取りする。将来は社長と副社長」と盛り上がるころなのに、雪政はうつむいたまま黙り込む。

俺が鉄棒から降りると、雪政も降りる。

そして、顔を背けたまま、ポツリと言った。

「おれ、転校するんだ。海外に」

動揺を悟られないように、おどけて茶化す。

「かっこええー、どこの国だよ？」

「サウジアラビア」

社会の時間に聞いたような気もするが、ラクダがいることしか、覚えてない。

「あー、えーと、その」

俺はなんとなく雪政に手を差し出した。

「ラクダに乗ったら写真を送ってくれ」

「OK！」

俺も何かおくりたい。

## 2話「ひらめき」

終業式が終わると、雪政はそのまま飛び立った。俺は見えるはずのない飛行機を探して、空を見上げた。

ただ淡い水色の空が広がっていた。飛行機雲さえなかった。

翌日、町全体が写る場所を探して歩き回った。小さな町では、すぐに噂が広がり、飲んだくれの親父どもが集まって見物しに来た。

「見せてみる。ダメだこりゃ。お前らがチャリで落ちた用水路が写ってねえじゃねえか。やり直せ」

もっと高いところならと、鉄塔に登ろうとしたら、親父たちが群がって阻止された。

「バカやろう、死ぬ気か！」

「だって高いじゃん！」

「撮れないなら模型を作れ！」

「どうやって？」

「そんなもん、画用紙でもなんでもいいだろ。陽介は雪政がいないとほんとポンコツだな」

「ちげえねえ」

親父たちのばか笑いに一瞬ムッとしたが、筋は通っている。

ならば、夏休みの自由研究として、作ってはどうかだろうか。親に材料を買ってもらえる上に、時間を割いても文句を言われない。

### 3話「公式と数式」

職員室で担任の先生に、町の地図をコピーさせてほしいと頼みに行ったら、ネチネチ質問される。

「だいたい事情はわかった」

「貸してくれるんですか？」

「貸すのはいいが、陽介に縮尺が分かるのか？」

言葉の意味が分からず、答えられずにいると、担任が脅すように畳み掛ける。

「五年で習った割合の親玉が縮尺で、6年で習う」

うっ。ダメかも。

あきらめかけたその時、雪政からラクダに乗った写真が届く。

「雪政が約束を守ったのに、陽介が破るわけにはいかねえよな！」

「はい！」

「今日から俺と算数の特訓だ。覚悟はいいか！」

「はい、お願いします！」

言っちゃったよ、俺。どうすんの？

夕暮れの田舎道をトボトボと歩いていると、雪政の計算で紙飛行機を作った思い出がよみがえった。

「陽介は計算することと、公式の理解をごっちゃにしてるから、間違える。まず、公式の意味を理解しなくちゃ。変わっていく中身の数字はあとでいい」

翌日、俺は担任の話は初めて真剣に聞いた。

## 4話「達成」

俺はまず模造紙を手に入れた。

床に広げて、椅子の上からカメラで撮影する。どう試しても、半分しか写らない。

つまり、町全体を半分に収めるためには、家はかなり小さくなる。

唯一の救いは、建物より田んぼの方が広いことだ。

担任に習った公式で、1つ1つ計算していく。しかし、いくら計算が正しくても、ずれて貼ればやり直した。

四角に屋根を張り付けた白い家たちをそっと指で挟み、密集する新興住宅地に1つ、また1つと張り付けていく。

やっと古くからの家にうつる。

この家の柿、勝手に食ったら、家の人に呼び止められたなー。

怒られる覚悟をしていた俺たちに、でっかい段ボールいっぱいの柿をくれたっけ。朝、昼、晩。おやつも柿で、もう一生食いたくない。

でも、雪政と一緒にならもう一度食ってもいいかな。

完成した模型を、椅子の上から何枚も撮影した。全体も、アップも、いっぱい撮った。

雪政に送ったら、即返事が来た。

「思い出がいっぱいだね！」

「俺たちの町だからな！」



---

俺たちの町

---

著 者 ELYE

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---